木下杢太郎全集

第二十四巻

木下杢太郎全集

第二十四巻

木下李太郎全集 第二十四巻　第二三回配本（全二十五巻）

一九八三年三月二八日　発行

定価四二〇〇円

著者　太田正雄

発行者　緑川亨

発行所　株式会社　岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・三秀舎　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 太田元吉 1983 Printed in Japan

目次

地下一尺……一
地下一尺　壹及貳　壹……一九
地下一尺　貳……二九
地下一尺　參……四五
地下一尺　四……六七
地下一尺　四……七一
地下一尺　五……七九
地下一尺　六……九三
地下一尺　七……一〇一
地下一尺　七ノ下……一一三
地下一尺　其八……一三九

地下一尺　第九……二〇九
地下一尺　十……二二七
地下一尺　十一……二三七
地下一尺　十二……三一一
地下一尺　十二(ママ)……三二三
地下一尺　十四……三四七
地下一尺　十五……三六一
地下一尺　十七……三九五
地下一尺　十九……四三五
地下一尺　貳拾……四七一
後　記……五四一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

地下一尺

○

われ幼かりし折は如何なる兒なりけむ、人の話にきゝまた自らおもふに、甘やかされ育の憶病小僧なりしが如し。されば性、優柔不斷にして、其生活はたゝ時の進捗と、人の意向との潮流に從ひ、その日その日の衝動に走ること水馬の左往右往にも似たりし也。中比一たびわれ、われを顧み始め悚然としておそれおのゝきぬ、はじめて若き男の生活は此の如きものなるか、人生此の如きものなる可き歟を疑ひ、器小なればまた大きからむ筈はなけれど、多少の煩悶をもなして、昨今漸く我道を求め得たりと何者よりかほのめかさるゝ心地するに至れり、げに今までは、われ生れたりしが故に生きたり、今や反つて大にわが生存を感謝す。

而してわが幼時の狀態右の如くなりければ、かゝる性質の兒の類に漏れず、われ亦物語、雜誌の類を好みて自らも之に摸して作りしものもありき。今にして之を見れば、輕佻浮薄、冷汗一斗の感に堪へざるものからなほ歳時の空氣を隔てゝ之を見れば物象模糊として懷舊の情を惹起さゞるはなし、且小にして凡なるものながら、わが思想發展の跡もわが目にはおかしければひとりほゝゑみの種にもと書きつけをく。

○

われ、彼の二葉の芽を慕ふ、二葉の芽地上に生ず、何の故ぞ、たゞ彼生じたるが故に在りといふ莫れ、何物かの力しなくんば、いかにして生じ得む乎。何物の力？　わが官能之を知るを得ず、而かもわれ之を感ずる毎に崇高の念に堪へざる也。

二葉の芽、地下より生ず。地下一尺のところ、若し土と壤とに過ぎざれば、彼の芽若うして亭々の樹となり、其梢に天の瀬氣を慕ひ、其葉に永遠の憬憧を宿すことあらむ。あゝ地下一尺のところ、土、土ならむや、壤壤

ならむや。

われ蠢々の兒、豈自ら二葉に擬するの僭越を敢てせむや、たゞわれ二葉を祝福し、併せて其ふるさとなる地下一尺を歎美す、實に故郷を慕ふ心はやがて神祕を追ふの心なり、唯願くはわれをして更に地下一尺を歎美せしめよ、願くばわれに敢て地下一尺を以て、我此書に名付くるを許したまへ。

明治三十七年七月日、我十九度の誕生日に近き比、小石川白山の臺上にしるす。

この書のするところ、われ、「或何物か」といふものと接觸しそれを多少解釋することありてしるしたる文のみ、他の文の爲めに文を作るまねせしものはとらず。

登旭賦

三十四年暑中休暇

天開け人生れこゝ第一日、
神の日記いまだ白き時、
見よ、大空雲あかきあなた、
忽焉として旭はじめて出でぬ。

天地いまや樂を奏して、
無極はるか朗なる聲あり、
『なは歌へ、なは新しき望を求めよ！』
人歌ひぬ、鳥歌ひぬ、清き望を抱きて。

若き日、若き地齡を加ふる幾百千年、
人死し、人生れ、過去たゞ漠々。

あした赫々、旭海より出でぬ、
灝灝潮に乘りて光を人の世につたへ、

勇ましき聲にて、
『汝は歌へ、汝は新しき望を求めよ！』

○　　同じ比

われ、寂然として靜思すれども、遂に人間の必ず存在せざる可からざる所以の者を認めず、有れば可、無ければ尙可、思へ歳月變僊(ママ)、幾千萬年の後、地球老いて人界の事僅かに其遺骨に其面影を殘すとき、物なければそこに迷なく、憂なく、樂なく、悲なし、その時よ、誰か塵界の冨貴を忌み、山に隱るゝ必要あらむ、將た、誰か荒野、雲黑き所、絞臺の上に醜き靑み顏を殘す必用あらむや

＊　　＊

秋風一陣白露を落して白月漸く家根のあなたに落つる時夜の鐘殷々遂に闇に消えぬ、

（累骨堂、寂々錄といふ滑稽なるものゝうちより）

青嚙錄

こは三十四年五月比、甚だ滑稽なる、きいた風なでたらめなり、内に「畢生の目的」「帝國主義」「噫不幸なる友」「桃をぬすむもの」等あり、これをのするもの溪流二卷一號といふ蒟蒻版雜誌也、

桃を盜む者。

雨柳に舞ひ、燕軒に囀るとき、我荒園裏の若桃、果實群集して一枝垣を越えて走る。

何者の惡戯ぞ、竹竿を以て此美しき青桃を落さむとするは。吾は叱しぬ「コラッ、桃を取るではないぞ」＝此時竿頭やゝ震ひて遂に垣外に隱る、されど見よ、其竿は再び響をなして垣の下方の隙間より園内に入り來れり、吾は二回の叱聲を發しぬ、同時に竿は園内に投げられたり、おゝ其時よ、赤き鼻緒の草履の上に、小さき軟き(ヤワラカ)足現はれぬ、齡は、六七歳ならむ、蓋し彼は叱聲に驚き惡意なきを表はさむが爲めに竿を投げたる也、我は二回の叱咤を恥ぢぬ。あゝ清き哉罪の終るときや。われに果して彼を叱する正當ありしか、我は彼を抱きて罪を謝せむと欲せりき。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

畢生の目的＝慾望とは何ぞや

（如何にかつて誤れる解釋をなせしよ）

人生の目的＝慾望とする所のものは何ぞや、名邪、金邪將た權邪。夫れ然り、始めて呱々の聲を擧ぐるとき既に之を思ひ、咏々の語唎々の罵、皆之に因らざるはなし、然れども、そは大目的を達す可く起りたる第二の小目的に過ぎずして其畢生の大目的＝大慾望は然らず、吾は『同族の播殖』こそ然かなれと思ふ。

聞かずやアルプスの麓、喊聲天を動かし、ウォートルローの野彈硝地を振はしむるを、噫十九世紀の曙、赫々たる奈翁の偉業、果して何するものぞ。

見ずや南阿の山、北清の野に强狼牙を磨くところ、そこに弱羊苦に泣くを、噫此慘劇何の爲めにか起る。

思へば此答は單純なる哉『自個の勢力を振はむが爲めと』夫れ同族の繁榮＝畢竟するに同族の播殖を望まんが爲めに貴重なる精灵を奪ふ幾千萬、思茲に至れば單純なる此語の價は甚だ高きを感ぜずんば非ず。人間以上のものとして又は理想の聖人として世人が仰慕措く能はざる耶蘇、孔子が所謂「他を愛せよ」「己れの欲せざるところ之を人に施すなかれ」の語、噫美しい哉、遮莫換言すれば互に平和なれ、互に爭ふ勿れ＝共に繁榮なれ＝極言すれば『同族の播殖』を勉めよといふ範圍内を徂徠するものに過ぎざるを見れば『同族の播殖』の語實に尊ぶ可き哉。

思へば「正義」や「忠孝」や「誠實」や「善美」や其他「善」を現はすあらゆる行又は「穢惡」や「曲邪」や「欺僞」や「罪惡」や其他「惡」を表はす無數のもの、一は人之を尊び神之を嘉し、他は人之を憎み佛之を賤

しむ然れども此間果して幾歩の徑庭かある。
卽ちそはたゞ一は博愛的に、他は利己的に、彼は廣義に於て天下同類の幸を祈り是は狹意義に於て同家族乃至は己れ一個の福を欲するのみ、其『同族の播殖』を望むは共に等し。
噫夫れ或は喜び、或は笑ひ、或は悲しみ或は怒り、考へては東奔し感じては西に去り顏に汗し手を汚すも又之によりて起る一種の現象に過ぎざる也
念へば世人が尊び恐るゝ神の聲、魔の叫びも啻ならざる「憲法」や「法令」や「正義」や「人道」や將た「武士道」も又は「天國」や「極樂」や「惡魔界」や「地極」も假令ば植物が一種の天與の方法として或は鳥により種子の播布を求め或は翼の作用を以て種子飛揚せしむるがごとくに、こは人爲的に、それ唯或者は寬に、或者は狹に、或者は博愛に或物は利己に其「畢竟の目的」を達せしむ可く設けられたる方便に外ならざる也。
爾世を悲しみて淵に身を投じたるものよ、世を白眼して山に隱れたるものよ、又は厭世の詩人よ、乃至はそを衒ふものよ、爾其行乃父に忠なるものといふ可からず、爾は飜然其行を改むるにあらずんば殺人犯より、强盜より尙「人間界」に於ける一層重き罪人たる可きものなるよ、
こゝに至り我は我惱を强いて靜めて「人界の美」を呼はん哉。
われ此文をよむにつけ、いよ〳〵今のわが考今のわが行に冷汗を流すを禁ずる能はず、而かも我等は今修養のとき也、其稚き思想、其變遷等の餘義(ママ)なきを知り、强いて此文をこゝにかゝげたり。

壬寅日記序

三十五年一月

△此文は復寫せず、要する當時誰も必ず同し軌道をふむならむ、宇宙渺人間眇の感より懐疑を抱き懐舊の哀情に自ら慰めし折也、

一月十日記

――、山疊々鐳鉢の如き鄉を出でし吾、今日始めて東京の朋友と東京の學校に關する話をなし不愉快なること限なし、乾燥なる學校、不傑(ママ)なる學校、煙艸の烟に充つる學校、教授の不熱心なる學校、輕佻なる聲に充つる學校、斯くても吾人は美しき＝假令漸々不美化しつゝあるもさはれ吾人の溫き家族の愛情、或部分までは村人の同情ある＝田舍をすてゝ醜なる東京の不傑なる學校裏に學ばざる可からざる邪、噫人間の子、蠢々徒に數のみ多く、生存競爭は益烈しき結果、遂に形式的學問、智力を磨く可き學問は崇ばれて其以上なる純美なる人の灵は彼の爲めに抂げられつゝあるよ、太古の世、而してわが住むべきところ、然らずんば固より生もなく唯空なる可き吾身なるに然るに吾は今世に生れたり矣。

小泣記

三十五年二月

洋罰(ママ)紙の一面に泣言かきたるものなり、今再讀遂に破棄す、

要するに一時生活の小標準を失ひて寂寥を感ぜしときの記なり。

對　月

同、登旭賦に對す、

『時聲なくして無始無終、
空渺(クウ)として無極無限
神ありや、靈ありや—非か
說く勿れ、地球既に老いて冷一團。

昔、月西より出でて
李白醉ひハイネ歌ひき、
同じくこれ懷疑の淵に臨みて
たゞ空しく月息つく。

釋迦誰(た)が子基督何者
たゞ灵を說く魔の子、
見よ今いづくに天國ありや、——
骨碎け土となり過去幾年。

已(や)んぬ矣、生類の跡はたえて
宇宙の一星死に頻(ママ)するの時
古骨累々月に白きところ
颼(ヒョウ)たるは何ぞ、これ「終」の叫び！

あゝ餓えたるものいねて
世の聲たえし時に
よはの鐘にのりて
月の語るを聞けな。——

孤影　同

夕べの風を野べに立ちて
この世を思ひ我を疑ふ、

—あゝわれいづくよりきて、いづくにか去る—

み空は遠く月は小さく
我影ひとつ野邊に細し。

星夜空語　同

一、

夕べ月まろかりき、遙かに塵寰を去り寂寞の境に立ちて仰ひで天を見むか、蒼穹渺茫として無限より來り無限に走り漠然として形なく寂然として聲なし、斯くて灼々たる太極はこゝに宿し、煌々たる星斗亦この内に横はり、而かも在るや整然として法あり亂れず。

嗚呼大なる哉宇宙や、われ今地球の上に立ちて、そを形容すべき言葉すら知らざる也、此時われ獨茫然として

飜つて思を人界の上に廻せばまことに眇乎たりな(ママ)人の子、斯くして寒心慄然として起り吾遂に座に堪ゆ可くもあらず、噫人！　彼の占むる所、僅か五尺の空間に非ず乎、五七十年の時間に非ずや、さるを此微少なる身を以て茫漠たる無限の大海を泳ぎ渡る可く氣を勵まし力を盡すものから悲しい哉、死の激浪は用捨なく彼が躰を呑むでこゝに天ははかなくも人生の終をぞ宣告すなる。

二、

然りと雖も彼世に在るや乃ち富むあり、貧しきあり、聖賢あり、惡漢あり、英雄あり、凡夫あり、時には□(空白)地を動かす智慧あり、炎々天を焦す情火あり、これ何するものぞ。

之を見るに富むものは揚々、貧なるものは戚々、聖賢の顏常に□(空白)惡漢は則ち寥々、若しそれ英雄に至つては傲然として天を呑むものゝ如く、凡夫はたゞ食ひたゞいねて平々且凡々。

されど果して英雄は爾く大に、凡夫は爾く小たる可き歟 試みに思へ富者はよく不老不死の藥を得、聖哲の學宇宙神祕の門を開き得る乎、或は英雄豪傑—彼等よく運命に抗し自然を破壞し得べき乎、大笑す、見よ北邙山下聖も惡も英も鈍も同じくこれ冷土に枕し或は化して石となり、唯地上に白墓累々として亂れ立つにあらずや、蓋し彼等相距る僅かに數步而已、

噫人智勝れたりと雖も極あり、人力大なりと雖も限りあり、而して哲學、而して科學、而して腕力、而して富貴、吾人は唯其名を擧ぐるだに煩雜を感ずる也。斯くして人間遂に眇乎懷疑、失望、恐怖、蓋しこれ吾人が生命而已。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com